



日本記者クラブ

総会記念講演

「しをんの花園を散策する」

三浦しをん 作家

2013年5月30日

日本記者クラブでの講演、記者会見の詳細は「要旨」をつけるのが通常の形です。しかし、三浦しをんさんの今回の講演という名の「トーク」はその必要がないと思います。要約などしてしまえば、興をそぐことになります。

「凜」としていてユーモアがあり、「常識」を踏まえつつ、規格外のことに興味を抱き、しばしば見せる「ウフフ」の表情がとてもチャーミングです。前置きはそのくらいにして、さっそく「しをんワールド」に踏み入れてください。

司会 日本記者クラブ理事長 吉田慎一

(朝日新聞上席役員待遇 コンテンツ統括・編集・国際担当)

聞き役 日本記者クラブ企画委員 橋本五郎 (読売新聞特別編集委員)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会：吉田慎一・理事長（朝日新聞上席役員待遇 コンテンツ統括・編集・国際担当） 皆さん、ようこそお集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日は、作家の三浦しをんさんをお招きいたしました。よろしくお願いいたします。

この記念講演会は、ほぼ40年前の1975年にスタートして、初回の講師は松下幸之助さん。当時すでに相当高齢だったと思われます。これまでは松下さんのようにベテランの方が非常に多くございましたけれども、きょうは一転、これまでで最も若いゲストをお迎えいたしました。どうぞご期待ください。

まず、三浦さんのお話を伺う前に、簡単にプロフィールをご紹介します。

三浦さんは、東京のご出身です。大学をご卒業後、就職活動を題材にいたしました『格闘する者に〇』という小説で作家デビューされました。2006年には、『まほろ駅前多田便利軒』で直木賞を受賞されております。この作品をお読みになった方は多いと思いますけれども、これは、東京郊外に設定されました架空の都市まほろ市で便利屋を営む2人の若者がさまざまな依頼を解決していくというストーリーでございます。

この直木賞の選考委員だった故井上ひさしさんの言葉ですと、「都市生活の報告小説であり、友情小説でもあり、私立探偵小説でもある」、こういうふうに評されまして、また、選評の結びでは、「本作はため息が出るほど、見事で爽やかな成長小説であった」、というふうに評されております。これが2006年の小説でございます。

最近では、職業といたしますか、仕事と申しますか、そういうものを題材にした数多くの作品を出されております。例えば文楽を描きました『仏果を得ず』とか、林業をテーマにしました『神去なあなあ日常』、それに辞書づくりに挑む出版社の辞書編集部員たちを描きました『舟を編む』でございます。『舟を編む』は、昨年の本屋大賞を受賞されたことは、皆さんもご存じのとおりでございますし、当クラブでも、この作品の同名映画が公開される前に先立って上映しておりますので、ごらんになった方も多いかと思います。

三浦さんは、小説ばかりではなくて、エッセーも数多く残されております。本のタイトルをご紹介しますだけで楽しくなりそうな、そういうものが多いんですけれども、例えば出版されたものは、『三四郎はそれから門を出た』とか、『乙女なげやり』とか、『悶絶スパイラル』とか、こういったエ

ッセー集も出していらっしゃいます。

エッセーと小説という2つのジャンルを股にかけていらっしゃるような活動でございますけれども、その2つのジャンルがどういうふう違うのかということ、あるインタビューで三浦さんは次のようにお答えになっていらっしゃいます。「エッセーは鮮度が命で、小説はそしゃくする時間が必要。それぞれの回路は違い、エッセー担当と小説担当の別の三浦しをんがいるんです」。さて、本日はどちらの三浦しをんさんが出ていらっしゃるか、そこも楽しみにしたいと思います。

本日は、特別に対談形式で行うことにしました。聞き役は、三浦さんとお知り合いであります、当クラブの企画委員で読売新聞特別編集委員の橋本五郎さんです。2人で、かけ合いのような形で進めていただくということにして、私も隣に座って聞かせていただくということで、失礼させていただきます。

それでは、まず三浦さんから一言、ご挨拶いただきまして、それから対談に移っていただくという手順にしたいと思います。では、三浦さん、お願いします。

三浦しをん 初めまして。松下幸之助さんに比べると、何か申し訳ないです。貴重なお時間を割いていただいたのに、ためになるお話などはもちろん何もないんですが、聞いていただければ幸いです。よろしくお願いいたします。（拍手）

吉田 それでは、橋本さん、よろしくお願いいたします。

橋本五郎・企画委員（読売新聞特別編集委員）

松下幸之助さん、そして文化勲章受章者やノーベル賞受賞者、そういうゲストの中にあって、今回は、日本記者クラブとして清水の舞台から飛び降りると言っては三浦さんに失礼なんですけれども、まるっきり違う人を選ぶことにしました。それによって、我々の頭も少し未来に向けて進むように不遜にもしようではないか、そういう崇高なる使命感のもとに三浦しをんさんにおいでいただきました。

三浦 超軽量級が来ちゃって、すみません。（笑）

橋本 あらかじめ、三浦さんに、「肩肘張ることなく思いの丈をお話してほしい」、こういうぐあ

いにお話ししましたら、「肩肘を張らないのは、私の最も得意とするところであります」、こういうことでした。

ということで、きょうは気楽にお話をさせていただきたい、そう思います。

三浦 お願いいたします。

橋本 これからは、三浦さんでは堅苦しくなりますので、「しをんさん」と呼ばせていただきたいと思います。

三浦 はい。いつもそうですもんねえ。

橋本 そうですね。あまり日中ではなくて、夜、飲むときにお会いするという……。

三浦 そうですね。読売新聞の書評委員会と一緒にさせていただいて、話すときは、大概2人ともへべれけですね。

橋本 このあたりにちょっとワインがあれば、もう少しいいんですけれども、そういう前例はないということでした。

さあ、まず最初に、最近、読売新聞にエッセイを書かれています、昼夜逆転しているらしいですね。

三浦 はい。

昼夜逆転の日常

橋本 作家というのは、何かやっぱ変わっている人、昼夜逆転しなければ書けない人たちなんです。あまり詰問口調ではよろしくないんですけれども、なぜ逆転するのだろうなあ、そういうちょっと素朴な疑問があるんですね。日常生活はいかがなんでしょうか。

三浦 人間の体内時計というのは1日25時間だという説がありますよね。あれは本当だと思うんですけれども、どんどんずれていくんですよ、どこにも出掛ける必要のない生活だと。なので、人間は自堕落になると、朝も昼も夜もなくなって、いまは、私は大体夜中の3時ぐらいに起きて、それで夕方7時ぐらいには寝ていますかね。そうす

ると、1日9時間も寝ていますね。

そういう感じなんですけれども、それが、そうですね、私の場合、3カ月ぐらいいかなあ。ですので、それでどんどんずれていって、朝の4時に起きて、夜10時とかに寝るというときもあるし、だから、私に電話をかけてくる友達も、家族も、いつも、第一声は「寝ていた？」なんですよ、どんな時間であろうとも。常に寝ている印象があるみたいです。

橋本 そうすると、寝るために起きているということになってしまうんですね。しかし、一番の基軸に据えられているのは、小説を書き、エッセイを書くことなわけでしょう。

三浦 まあ、一応そういう建前のもと……。はい、そうですね。でも、大体は本を読んだり、漫画を読んだりしているので。あとはご飯を食べているかなので、仕事はあまりしてないんですけれども、何かパソコンの前に座ってないと言い訳ができないような気がして、とりあえず起きている時間は座っているんですけれども。

橋本 そうすると、座っていて、いろんな、次に何を書こう、それにはこういう題材があるなどというのは、当然ながら、起きているときに出てくるわけですね。

三浦 ウフフフ……はい。あ、でも、夢でヒントを得ることもありますね。なので、本当に、もう本当にこれは締め切りに間に合わない、それこそ、編集者の方が大体うその締め切りを伝えてくるじゃないですか。

橋本 大体そうやりますね。

三浦 ええ。

橋本 きょうも会場にいらしているんでしょう、きっと。

三浦 はい。それすらも、もう1~2週間過ぎていて、もう本当に、本当に今日中に原稿が上がらないと、雑誌が白くなるかもなというときには、あえて寝るようにしているんですよ。そうすると、せっぱ詰まった脳みそが寝ているときにフル回転

して、ちょっとヒントになる夢を見られるときがあるんですよ。見られないことも多いんですけどもね。(笑)

橋本 普通なら、強迫観念でなかなか寝られないというぐあいになっちゃうんですけどね。

三浦 はあ、そうですね、そこをあえて寝る。でも、そういうときは、さすがにむせて起きます。おじいさんみたいな、「ウエッホ、ウエッホ」みたいになって目が覚めますね、ストレスでしょうか。

タイトルのむずかしさ

橋本 ふうーん。いろんな書かれたものを、『しをんのしおり』とか読んで、きょうのこのトークのタイトルをどうしようかなと思って、いろいろ考えた結果、「しをんの花園を散策する」にしました。何かちょっと乙女チックですね。

三浦 何かくっさい花が咲いてそうですね。

橋本 小説を書く時は、そういう感じで、まずタイトルを考えるんですか、中身の前に。

三浦 いえ、考えないです。タイトルは私は後の場合が多いですね。例えば『仏果を得ず』という小説は、タイトルが、文楽の小説を書きたいなと思うと同時に浮かんだんですけども、そういうのはまれで、エッセーも小説も、大概は書き終わってから一生懸命タイトルを考えてひねり出す感じですね。

橋本 後でタイトルをめぐる編集者との確執について話していただきますか。

三浦 別に確執は……。

橋本 確執はないか。

三浦 はい。

橋本 編集者に対しての心理的な葛藤というか、まあ、同じことかな。この『しをんのしおり』の本の中に、タイトルをどう決めるかという話が出てきますね。

三浦 そうですね、いつも悩みますね。

橋本 ここのところがなかなかやっかいですね。自分にとってピタッとくるタイトルというのと、編集者がいいと思うのがなかなか一致しないところもあるのではないですか。

三浦 そうですね、自分でこれがいいと思ったタイトルがなかなか通らないときはありますね。

橋本 でも、確かこの『しをんのしおり』の時のように、この時断ったタイトルがあとで別の本にちゃんとタイトルになったこともあるんですね。

三浦 はい。『しをんのしおり』という最初のころのエッセーなんですけれども、自分の名前をタイトルに持ってくるというのが、非常に恥ずかしいというか、何様だよと思って、それが嫌だったんですよ。

しかも、そのころ、鈴木宗男さんが、何か「ムネオハウス」という名前をつけた建物が問題になっていて、エーッと思って、「しをんのしおり」というのは、つまり、「ムネオハウス」みたいなことではないかと思って。それで、どうしよう、嫌ですと言ったんですけども、そういうタイトルでと編集者の方が……。まあ、わかりやすいし、語呂もいいからみたいな感じで押し通されて。私は本当はそのエッセー集に「人生激場」とつけたかったんですよ。(笑)

橋本 ああ、そうなんだ、「人生激場」にしたかったんですね。

三浦 やくざ映画とかが好きなので。それで、没になったタイトルを、また時期をみて、次の次ぐらいのエッセーのタイトル候補にこっそり挙げて。

橋本 ちゃんと目的は実現した。

三浦 そうなんですよ、まんまと達成しました。そういうことはありますね。

やっぱりキャッチーさと言うんですか、そういうのがタイトルには割と求められるので。それは当然なんですけれどもね。

橋本 いま、お聞きして思いました。全く自分のことながら、読売新聞の私のコラムは「五郎ワールド」というんですけれども……。

三浦 はい、フフフフ……。

橋本 もう、穴にでも入りたいような気持ちです。

三浦 それはいいんですよ。(笑) 橋本さんは、もちろん、いいんです。「ムネオハウス」だって、別にね。

橋本 ねえ。

三浦 いま思えば、別に……。

橋本 しかし、宗男さんを意識していたとなると、鈴木宗男さんも喜ぶかもしれませんね。

三浦 いえいえ、そんなことは……。お怒りになる。(笑)

橋本 先ほど、吉田理事長から、1つの仕事に専心した題材に集中してという紹介がありました。どこかで、もうそれはやめようと思ったり、そのテーマがやっぱり幾つか、何回かにわたってやって、一巡とは言わないまでも、書けるところまで何冊か書こうという、そういうのはあるんですか。

三浦 そうですねえ、例えば林業についての小説は続編みたいなものも出しましたが、それはちょっと書き切れない部分があったなと思ったからで、大概はもう一冊にすべてをつぎ込みますね。なので、大体一冊で終わるのですが。取材とかも結構時間がかかるので、なかなか次々とはいかないですね。

橋本 この『神去なあなあ夜話』、この本ですね。

三浦 はい、林業の本ですね。

橋本 私は読みながら思ったのは、吉村昭さんが『一つのことのみに』というエッセーを書いて

いまして、その中で、自分が少年時代、父親が専売のたばこ工場を見学して帰ってきて、もう興奮しながら帰ってきて、こう言うんですね。工場の女性がたばこを袋に入れるんですけれども、パッとつかむと20本。何度つかんでも20本なんですね。昔は「敷島」というたばこなんですが、要するに、その女性に言わせると、21本つかむと100本もつかんだような気がする、19本だと4~5本の感じがする。だから、ピターッと20本でないとだめだ。もうそうになっているというんですね。やっぱり1つのことに専心するとそこまで行くんだなというのを吉村さんは書いています。しかし、しをんさんの小説は決してそういう何か教訓的なことを書かないで、実に日常のおもしろさを書いていきますね、そうですね。

三浦 小説、しかも、エンターテインメントと言われる小説なので、そこはあまり教訓——いまの吉村さんのお話も、別に教訓ということではないんだけど、職業に対する矜持みたいなものをあまり前面に出し過ぎると、小説としてはちょっと押しつけがましいと感じる読者もいらっしゃると思うので、そこはなるべくさりげなく……。

ただ、木を切る技術とか、あと、山の空気の変化を感じる力とか、そういうのは実際に林業をしていらっしゃる方の話を伺うと、すごくいろいろおもしろいエピソードがあるので、そういうのをちょっとずつ入れてはいるんですけれども。

橋本 おじいさまでしたか、林業に関わっていたのは。

三浦 そうです。私の祖父は三重県で林業をしていまして……。

橋本 お父さんのお父さん。

三浦 父方の祖父ですね。それで、私にとっても、林業というのはどういう仕事なのかなというのが小さいころから興味があったので、それで、調べてみたんですけれども。

祖父は遊んでばかりいて、全然仕事をしているふうではなかったもので、林業をやっている中でも極めてぐうたらな人だったんだということがわかりましたけれどもね、ほかの方を取材したら。(笑)

大西巨人と大橋巨泉

橋本 しをんさんの書かれているものでおもしろいと思ったのは、大西巨人を大橋巨泉と間違えていたとかね……。あと、他に何か間違いはありませんでしたか。

三浦 何だっただろう。何かそういうことはよくあるんですけども。いや、大橋巨泉さんだってすごいですけれども、大西巨人さんの小説というのは、ちょうど絶版になっている時期だったんですよ。

橋本 『神聖喜劇』でしょう。

三浦 はい、『神聖喜劇』が。それで、私、全然知らなくて、そうですね、大学生になっても知らなかったです。それで、古本屋でアルバイトをしていたんですけども、なぜか、軍隊経験がおありなのだろうなという感じのお年の男性が、古本屋さんに「大西巨人さんの『神聖喜劇』はないかね」と探しに来られるんですよ。そのころ、相当の頻度で来られたんです。

それで、大橋巨泉さんがまた本を出したのか、すごい人気だなあ、何か人生についての本なのかななんて思っていたんです。ある日、先輩の店員から、「何をぼけたことを言っているんだ」とすごくあきれられて、それで、そのときに文庫がちょうど復刊されたんです、光文社文庫から。それで、これはちゃんと読んでみなければと思って読んで、むちゃくちゃおもしろかったの。

でも、軍隊経験がおありの探しに来ていたおじいさんたちが満足するような内容とはちょっと違ったような気がするんですけども。(笑) 同期の桜的な、そういう何か懐かしさとか連帯感とかを喚起するような小説とはちょっと違うのではないかなと思いましたけれども。

何で大橋巨泉と思ったんですかね。(笑)

橋本 何となく似ていますけれどもね。

三浦 はい。

意地悪評に快感？

橋本 ブログを、いろんな自分の作品に対する感想とか、わかりかし丹念に見られていて……。

三浦 そうですね、新刊が出るとやっぱり評判が気になるので。

橋本 やっぱり気になりますか。

三浦 はい。エゴサーチというんですか、自分の名前を入れて検索しますね。

橋本 大体、自分の書いたものを評価してくれるほうありがたいですよ。

三浦 それは、もちろん、そうですね。

橋本 けなされても、勉強になったといっても、やっぱりあまりおもしろくないでしょう、それは。

三浦 勉強にならないですよ。

橋本 勉強にならないですか。

三浦 ハハハハ、そんなことはないですけども、腹は立ちますよね。

橋本 そうですよ。

三浦 はい。

橋本 それで、いろんな反応があった中で、読み方はそれぞれあるんだけど、その読み方の感想の最後のところに、「しかも、ブスだよね」、こういうけしからん中傷を書く奴もいるんですね。

三浦 フフフフ、中傷というか、事実の指摘ですから、しょうがないですよ。でも、よくあるんですよ。まあ、しょうがないですけどね。

橋本 それに対して、それは小説に全然関係ないだろう、憤激が込み上げてきて、「顔面で小説を書くわけではないんだよ、パソコンで書くんだよ」と心の中で反論したようですが……。

三浦 はい。まあ、泣き寝入りですね。(笑)

橋本 泣き寝入りするしかないですか。

三浦 「そんな書き込みをして、おまえの言うことは……」みたいに反論できないですからね。

橋本 橋下徹さんみたいにはいかないですね。私から言わせれば、そんなのは見なくてもいいのではないかと思うんですが。

三浦 ただ、これだけネットを多くの人が使うようになって、自由にそこで自分の意見とか感想を表明できるようになっていますから、それを見て見ぬふりというか、ないふりはやっぱりできなくて。

橋本 できない？

三浦 いや、もちろん、全然見ないという書き手の方も多いんですけども、やっぱり新刊が出た後とかは、どうかなあ、気に入っていただけたかなと思って、つい検索して、顔面についての記述とかを見て、ガクーンとなるんですけども、まあ、でも、いいことでもあると思うんですけどね、そうやってみんなが好きなことを言えるというのは。

橋本 でも、それは生産的なことですか。次の作品に生かされますか、あるいはその日、幸せな気分になりますか。

三浦 いや、憤激ばかりですよ。でも、おかしいことに、そういうのは最初はすごいガクッとなるんですけども、だんだん快感になってきて、もっと臍腑をえぐるような悪口はないかなと思うようにもなってくるんですよ。ちょっとマゾなんですかね。

あと、こんなふうに読んでくださったんだというありがたい感想ももちろんありますし、あまり俺だけがわかっていればいいんだみたいな、俺だけが満足いく作品を書いていればいいんだというふうには、私はやっぱりどうしても思えなくて、なので、つい見てしまいますね。

そのご指摘とかを次の作品に反映させるかという、全然しないんですけどもね。(笑)

橋本 橋下徹さん、私も一度、何でそんなのを

やるのかと聞いたことがあります。

三浦 あ、ツイッター……。

橋本 ツイッターですね。未明に、しかも、ものすごいスピードでやっているというんですね。聞いてみて、なるほどなと思いました。何でやるかという、それは自分のストレス解消なんだ、こうなんですね。要するに、さんざんつばら悪口を言われるから、徹底的にそれに反論して悪口を言うことによって気分転換になるというんですね。

三浦 ハハハハ……。それは、まあ……。

橋本 そういう日常というのは、果たして健康的な日常なのかという感じがちょっとあるんですけどもね。

三浦 切りがないですからね。私はあまり—あまりという、全然ツイッターとかはしてないんですよ。私の場合は書くのが仕事だから、プライベートで何も書きたくないというのはあるので、それもあると思うんですけども、あともう1つは、言うよりも聞くのが仕事の1つという、それは、取材に伺ってお話を聞くということもそうですけれども、黙って大半は寝ているだけけれども、それ以外のときも、何かを聞いているという、現実的に誰かの会話をこっそり電車で聞いているとかということもあるだけけれども、それ以外のもっと何か、言いがたいんだけど、自分の心の中だったりとか、妄想なのかもしれないけれども、何かそういう声を聞くということのほうが、しゃべったり、悪口に悪口で返すよりも、私にとっては大事という、心休まりますね。

橋本 どこかで言われていましたよね。要するに、誰かのちょっとしたことが、そこから大いなるヒントがあるんだということね。

三浦 そうですね、電車とかバスに乗っているときの会話とか、誰かの振る舞いとか、あと、もちろん、本を読むことも、その作者だったり、そこで描かれている登場人物だったりの声を聞くことだと思うんですけども、それが次に自分の中から何かを生むことにつながると思うんですよ。

それは、例えば新聞の記事を書くのであっても、

何かニュースの原稿を書くでも、ニュースの番組をつくるでも、やっぱり聞くことが一番底にあるもので。何か言われて、ただ黙ってはいはしようがないので、それに対して、すぐパッと答えるというのも、時にはもちろん大事だと思うんですけども、でも、やっぱり聞くことには時間がかかるし、それをそしゃくして何かを発信するには、本来だったらある程度の時間がかかることなのではないかなと思うんですよね。

ただ、もうこれだけネットとかが盛んになると、そうも言っていられなくて、ぼんやりしているうちにすべてから取り残されるということもあるので、その辺は難しいですけどもね。

橋本 書いたからには、売れてほしいですよ。

三浦 もちろん、そうですね。

橋本 そのために何かをするかということがありますか。

三浦 ただ、何をしたら売れるというのは、ほんとにないですよ。わからない。もうばくちみたいなもので、何かしたからこうなったという因果関係はほとんどない。もちろん、その装丁が皆さんの目を引いたとか、そういうことはあると思うんですけども。

橋本 映画とセットになるとか。

三浦 売り出し方とかはあるのかもしれないですけども、それをやったからといって 100%売れるのだったら、みんな、そうしますからね、そういうものでもないし。

橋本 自分の書いたものに対する再発見というか、『舟を編む』について、出来た映画を見て、完敗だとおっしゃっていましたが、完敗でしたか。

三浦 ええ、完敗だと思いますね。やっぱりすごく丁寧に映画をつくっていただいて、役者さんたちの演技も素晴らしかったし、美術とか時代考証とかもすごかったんですよ。そうすると、小説、文字だけで表現するものとはもう全然違う。迫力とか、あと、人間のちょっとした表情とか、それこそ、声のトーンみたいなもので、断然映画

のほうがおもしろいなど、あの作品に関しては思います。悔しいけれども、そう思いましたね。

橋本 そうすると、今度は自分の小説の中にそういう手法というか、その映像的手法を取り入れて、もっとリアルにするとか、そんなことは考えないですか。

三浦 そういうふうには思わないですね。やっぱり映画と小説は違うので。どうしてこういうふうに映画がうまくいっているのか、作品としてすごくうまく成立しているのかということは、自分なりに、感動すると同時に、クソーッと思うので、分析して考えるんですけども、それはやっぱり小説と映画では表現方法が全然違うので、そのまま生かせるということはないし、映像寄りにするとか、映像的なリアリティに小説を寄せていくというふうにはやっぱり思わないですね。文字表現には文字表現のよさが絶対あるので。

文豪への親近感

橋本 『漱石はそれから門を出た』でしたか。

三浦 ウフフ、三四郎は……。

橋本 ああ、『三四郎は……』でしたね。ああいう形でタイトル的にはちゃっかり拝借するというか、要するに、小説の大家について漱石や鷗外、こういう人たちのことはどう思っていますか。

三浦 私、海外の小説はあんまり数読んでないんですけども、日本のいわゆる文豪と言われる人の作品はかなり好きで、割と読んでいますよ。でも、勝手に親近感というか、勝手に友達ではないけれども、そういうふうに思って、おもしろい小説というのは、まるで自分のことみたいだなみたいに思えたり、へえ、こんな人がいるんだ。よく知らなかったけれども、実は近所に住んでいた変な人、みたいに登場人物のことを思ったりとか、そういうふうに全く知らなかった世界でも身近に感じられるというのが本のすごいところだと思うんです。なので、それを書いた漱石や鷗外のこと、身近で親しいおじさんみたいに勝手に思っちゃうんですよ。おじさんというか、結構若いんですけどもね、漱石だって。

もちろん、書くことを職業としている身としては、同じ作家、同じ書き手とは思えないぐらい、

すごい仰ぎみる存在ですけども、読者として本というものを媒介にすると、全然遠い存在だとは思えなくて、だから、漫画も……。

橋本 そうなんですね。

三浦 はい。私、漫画もすごい好きなんですけれども、漫画も、文豪が書いた小説も、エッセーであろうと、ノンフィクションであろうと、何でもそこは等価なものというのでしょうか、等しいものだというふうに思えますね。

橋本 文豪では誰が一番親近感がありますか。

三浦 好きなのは、やっぱり夏目漱石が好きなんですけれども、でも、川端康成の変態っぽさとかもたまらない味わいがありますよね。

橋本 なるほど。いや、先ほどから、そのことについて私もまだ触れていませんけれども、好みとしての変態っぽさというか、そういうのに相当興味あるのではないかというのが、何となく行間からにじみ出ている気がするんですが。

三浦 えっ、どういうことですか？ 私が変態が好きなんだなという感じ？

橋本 そうそうそう。ただし、活字上ですよ。

三浦 まあ、変態は好みですよ。

橋本 そうですか、そういうところもあるんですか。

三浦 ありますね。やっぱり過剰に過剰な人か、過剰に欠落している人が好きというか、興味があるんですよ。そういう人が日常でそばにいたら、ちょっと困る、お騒がせだと思うんですけども、そういう人のちょっといびつな感じが周囲の人を引きつけますし、何か物語をはらんでいるとも思えるんですよね。

橋本 それは、小説の題材としてですか。

三浦 いやあ、そういうわけでもないですね。やっぱり自分が見詰めていたい対象として、日常生活というか、そうですね。遠巻きに見詰めていたいのは、そういう人ですよ。

橋本 何かそういう人がいることによって、少し社会だとかの色合いが違って見えるとか、そういうことですか。

三浦 そうですね。どうしても均質化しようとする流れだったり、圧力だったりとかいうのは、どんな時代、どんな社会でもあると思うんですけども。それを何かはね返したり毅然と無視したりする、内なる情熱だったり、内なる空虚だったり、過剰にある人というのは、私にとっては非常に輝いて見えるし、そういう人がいなくなったら、この世の中終わりだと思うので。その社会の活力がなくなってしまうので、そういう人の存在を見つけるには観察したいんですよね。

橋本 しをんさんの文体には、おかしみがあったり、要するに、常に自分の中に引きつけておく、ちょいと——どういう表現にしたらいいのかな。決して平坦ではなくて、文体それ自身にある種のペースがあったりということを意識して、そうすることによって読者を引き込もう、登場人物の姿を少しくっきりさせようとか、何かそういう意図が感じられるんですけども。その文体については意図的な工夫はされていますか。

憑依の境地

三浦 いや、特には……。やっぱり文章というのは意図してどうこうできるものでもない。もちろん、人称とか、視点とか、そういう面は考え、ある程度、この作品にはこういう人称がいいだろうとか、視点がいいだろうとかということは計算できますけれども、文章自体は計算がいくものではなくて、あんまり意識はしてないですね。書いていくうちに、小説の場合は、登場人物のテンションみたいなものにどんどん引きずられていて、何か憑依される感じで書く。

橋本 憑依……。

三浦 憑依ですね、なります。

エッセーの場合は、ただ自分のアホな地が出ちゃっているだけで、(笑) それもまたあまり計算は

ないですけども。

橋本 確か私の記憶では、梅原猛さんが『隠された十字架』を書いたときに、自分でどんどんその世界に入り込んでいって、法隆寺の謎を深夜遅く発見したときは、自分ももう怖い気になったそうです。そういう感じにやっぱりなるんですかね。

三浦 そんな、梅原猛さんのような、そこまでのものではないですけども、でも、そういう部分はあると思いますね。なので、梅原猛さんのご著書とかも、それが本当に歴史的な真実かどうかは、またちょっと置いておいて、何か異様な熱気がおもしろい、すごくへエーッと読み進めてしまいますよね。そういうのは、やっぱり憑依型の方特有の、何かテンションというのはあると思いますね。

橋本 あの思い込むすごさというか、一番最近の梅原さんの本でいえば、岩波新書の『人類哲学序説』。88歳で書いたのが「序説」で、これから本論を書くというんですから……。

三浦 すごいバイタリティ……。

橋本 人類哲学を考えているのは世界で自分一人だと書いている。

三浦 えっ？

橋本 世界で初めての人類哲学の本だと書いているんですよ。そこまで思い込めるということのすごさというか。

三浦 何かきつと天啓みたいに、ある夜、ピシヤーンと、これだと思うんでしょうね。

橋本 ああ、まさに天啓でしょうね。

三浦 ええ、何かそういう感じがしますよね。

橋本 それに近いような経験、体験というようなものがありましたか……。

三浦 そんなすごいものは全然ないですけども、やっぱりちょっとどこか熱に浮かされて、ふだんの自分だったらあんまり思ったり言ったりしないようなことも、小説の登場人物になりきってしまうというか、ノリノリで演技しちゃうんでしょうかね、そんなふうに書いてしまうときはありますね。

橋本 そこが小説家の特技ですかね。ほかの職業にはないのかもしれない。これは小説だといえ、それで済む話ですからね。

三浦 そうなんです、そうなんです。どんな残酷なことを書いても、私はこんなことはちっとも思わないんですよ、この登場人物が勝手にみたいですね。登場人物に操られるように書いてしまつて……。まあ、うそなんですけどね。(笑)

橋本 そうでしょう、それは。実と虚の間を行き来できなければね。だから必ずあるんでしょう。

三浦 でも、ふと自分ではない人格になれる瞬間が——瞬間だし、それは錯覚なんですけれども、たまにあるんですよ。だから、役者さんとかも、もしかしたら、こういうふうに関にのめり込むときがあるのかな、なんて思ったりするときはありますね。

橋本 そうすると、イケメンにもて過ぎちゃって困るという小説も成り立つというか……

三浦 それは、何というんですかね、頭の中に、正気に返れと突っ込みを入れる魔女みたいなものがいて、おまえは何様だみたいな、おまえがイケメンにもてるわけはないだろうと、すぐ我に返っちゃうんですよ。例えば自分を反映させたり、投影させたりした女性の主人公だったり、自分を妄想の主役とかにすると、もうだめなんです。イケメンとデートぐらいは妄想の中でもできるんですけども、でも……。

橋本 それ以上進まない？

三浦 無理ですよ。では、さあ、服を脱ぐかみたいなときに、「待てよ、腹の肉が……」みたいな。

橋本 ハハハハ……。

三浦 妄想の中であっても、「はい、終了」となるんですね。

橋本 しかし、そのルビコンを一気に渡れば……。

三浦 渡れない、このルビコン川は渡れない。

橋本 渡れば、しをんの新たな境地が生まれるかもしれない。

三浦 そこはやっぱり慎重深く、自分というものをよく知っている私としては、そのルビコン川は決して……。

橋本 しかし、今後の大きな課題として考えてもよさそうですね。

三浦 そうですね、妄想の中でくらい、ちょっとベッドインしたいんですけど、無理なんですよ。

橋本 だから、小説家の特典を十分生かし切れてないという感じですね。

三浦ほんとですね。(笑)

書評のあり方

橋本 書評についてしをんさんが書かれているのを見て、我が意を得たりと思ったことがあります。

それは、漫画のことについては後でお聞きしたいと思うんですけど、「好きな本や漫画について書くうちに私は1つの真理を見いだした。それは、書評とは愛の表明でなければならないということだ。うまくいくときもあるし、愛はあるんだけど、表明が失敗に終わるときもある。それは、作品がまずいのではなく、私の文章がまずいのである」。この辺り、実に謙虚ですね。

三浦 いや、でも、そうなんです。

橋本 「書評というのは難しい。だが、これからは『愛がないなら、黙して語らずにおけ』を信条にしていきたい」

これは非常に味わい深い言葉です。私も15年以上、書評をしていますけれども、特に新聞の場合、それは専門の文芸誌とは違うのだから、新聞の書評というのはけなす書評は要らない。それは、この本を読んで、こんなによかった、できれば多くの人に読んでほしい、そういう本しかやるべきではないと私は思っているんですけども、それを実に“愛の表明”という、とてもいい表現でなされた。

その書評についてどうですか。自分の作品を書評されて随分触発されるところもあると思うんですけども。

三浦 本職の評論家の方がある作品を取り上げて批評するというのは、当然だし、けなすというよりも、そういう批判をするのは当たり前のことだと思うんですけども、特に新聞の書評、あとは、例えば新刊が出るので、それをPR誌とかに書評してほしい。その版元さんから、発売前にこの本の書評をしてもらえませんか、で、ゲラが送られてくるような場合。それでお引き受けした場合には、やっぱりけなす必要はなくて、もし、これはちょっとまずいなあ、あまり好きではないとか、ちょっと問題があるのではないかと思った場合は、もうお断りすればいいと思うんですよ。新聞の書評は、その作品はもう取り上げなければいいと思うんです。

なので、私は本職の評論家ではもちろんないので、読者の立場で、この本をどういう人にどういふところを勧めたいかということを書評では書きたいなと思っているし、そういう書評はやっぱりあっていいのではないかなと。何でも評論しなければいけないというわけではなくて。

橋本 論争は専門家たちでやってもらえばいい話で……。

三浦 そうですね。詳しい作品分析とかは、もちろん、評論家の方がやることですから、いいなと思ったものをみんなに「よかったら、ぜひどうぞ」みたいに勧めるのが新聞書評かなというふうに思いますね。

橋本 最近は、乙川優三郎さんの『脊梁山脈』

(新潮社)、なかなか深い境地の小説を紹介していましたね。

三浦 いやあ、あれは素晴らしい小説ですよ。

橋本 何かすご過ぎるとかというふうに書かれていましたね。『波』ですね。

三浦 そうなんです。あれは、新潮社のPR誌で、今度、新刊が出るのでということでご依頼ただいて、ゲラを読ませていただいたら、すごくいい小説だったので、「ぜひ書かせてください」と言って書かせていただいたんですけれども。

橋本 乙川さんという人は、『生きる』だとかいい作品がありましたね。私は最初の作品にびっくりしていたんですけども、途中からちょっと毛色が変わってきましたね。

三浦 ふーん、そうですね。

橋本 おそらく山本周五郎、藤沢周平の次の人ではないかと密かに思っていたんですけども、少し違う方向かなというぐあいに……。そうしましたら、今度の本は、そういう意味で、非常に深い境地に達したという感じです。

三浦 ええ。いままでは時代小説ばかりでしたよね。今回は戦後すぐを舞台にしていられるんですが、素晴らしいなと思いました。

橋本 それは触発されるんですか、自分が書くのに。

三浦 いやあ、とてもこういう小説は書けないと思って、そういう意味では、自分にがっかりするんですけれども。だから、触発というよりは、読んで、わあ、なんてすごい小説があるのだろうという、そういうほうですね。読者として幸せ、ああ、生きていてよかったなみたいな。こういう本が読めて本当にうれしい、幸せだなと思うんですよ。そういう気持ちで、次に、では、自分も書いていこうと思う気持ちにつながるのだと思うんですが、とても乙川さんの本のように……。

漫画の先進性

橋本 漫画についてはどうですか。漫画狂のようですね。

三浦 はい。漫画を読んでいるせいで仕事がかどらないぐらいでね。やっぱりここ何十年か、日本で一番質量ともに最先端、かつ深みをいっている表現は、私はやっぱり漫画だと思っているんですよ。常に新しい表現、新しい書き手が出てきますし、非常に深いところをついている。あと、本当に爆笑してしまうような、アホみたいな楽しい作品もあれば——アホみたいなものというのは、いい意味で——非常に深い人間の感情を追究しているものもあれば、本当にバラエティーに富んでいますし、テーマも非常に取り上げるのが早いですね。

橋本 このごろテレビのドラマも、活字の小説ではなくて、漫画からドラマになっているというケースが非常に多いですね。

三浦 そうですね。あまりそういうものばかりというのも安易だとは思いますが、それぐらい、やっぱり豊富ですよ、作品の質量が……。

橋本 それは、何なんですかね。

三浦 やっぱり読者が多い。読書人口自体が減ってきているということもありますけれども、だけど、やっぱり読者が多いですね。あと、小説に比べれば気軽に読めるというのがあるから、読者が多くなるということもあると思いますし、読者が多ければ、その分、その読者の期待に応えようとして、次々に編集者も漫画家さん本人もいろんなアイデアを練るでしょうし、自分の技術も磨いていくでしょうし、あともう1つは、アシスタント制をとっている方が多いというのも大きいかなと、個人的には思いますね。

小説の場合は、昔は弟子入りしてみたいなこともありましたが、いまはほぼそういうことはなくて、ただ、漫画家さんの場合は、売れっ子の漫画家さんはアシスタントさんや何人も抱えていらして、そういう人たちから、直接漫画の技術を目で見て学ぶ、すぐそばで学ぶこともできるし、どういうふうに作品に取り組んでいるかという姿勢を見せることもできるでしょうから、それで学んだ次の若い世代がどんどんまた自分で研さんを

積んでいくというシステムも出来上がっているようにも思います。

橋本 ある種の技術の伝承みたいなものができているということですか。

三浦 はい、そうですね。あと、心構えとか、資料の集め方でもそうでしょうし、そういうものを間近で見ることができるというのも大きいと思います。

橋本 大体漫画というものは小さいころ読んで、大きくなって卒業するものであるみたいに思っていましたけど、決してそうではないんですね。

三浦 いま、そういうレベルのはるか上を行っていますね。一生楽しめます。子ども向けのものもちろんあれば、大人向けの、エロだってもちろんあるし、あらゆるニーズに応えています。同時に、あらゆる世代が味わい楽しむことのできる作品も非常に多い。むしろ、そういうもののほうが多いのではないかと思いますね。

政治の世界のおもしろさ

橋本 いろんな職業の人を素材にして書かれているんですけども、私からの希望は、先ほど、「ムネオハウス」の話がありましたけれども、政治家を三浦しをんが取り上げたらどういうものになるのだろうか。それを考えるだけで結構楽しいのではないかなと。いかがですか、これは。

三浦 うーん、おもしろそうですね。

橋本 大阪の市長とかね。

三浦 いやあ……。

橋本 嫌ですか、それは。

三浦 ウフフフ……。まあ、でも、いろいろ過剰に仲良くしたり、裏切ったり、男の世界観満載で、大変そうだなと。でも、それがちょっとおもしろそうだなとは思っていますね。

橋本 表面的な政治現象ではなくて、もっとど

ろどろとした人間模様とか……。

三浦 どろどろしていそうですね。

橋本 そうね。権力をめぐる争いというのは、これは最も人間的な行為なのかもしれないですね。

三浦 そうですね。あと、その中で、女の人たちがどう振る舞っているのか、すごい知りたいですよ。普通は嫌ですよ、あんなおじさんばかりの世界に入るのは。何か大変そうと思います。

橋本 そうすると、政治家は政治家でも、女性政治家を組上に載せるというか、そういうのはありですね。

三浦 率直に言って、私はあまり共感できない女性が多いんじゃないかなと思いますけどね。(拍手)

橋本 会場から、拍手まで出てしまいましたね。(笑)

三浦 怒られちゃいますね、こんなことを言ったら。でも、そう思いますね。

橋本 なるほどね。

三浦 表面的なことと言うと、石破さんが話しているうちにほっぺたがポーッと赤くなってくるときがあって、何かすごい、何だろう、乙女チックなのかな、とすごい思うんですよ。あと、あの人を見ていると、家庭内で家族からどう扱われているのかなと。(笑) 何か「お父さん、話が長くてウザイ」とか言われちゃったりしているのかなみたいな、何かそういうことをちょっと想像させる部分があるなど。

橋本 なるほど。何となくその人の奥にあるものが見えてくるんですか。

三浦 何となくね。そういうある種の隙というんですか、そういうものがある人のほうがやっぱり楽しいですね。

橋本 それは、半分、親しみが持てるという意味で。

三浦 そう、そう。いろいろ妄想できるというか、想像できる人のほうが。

橋本 そういう意味では、石破さん以外にそんな人はいますか。

三浦 加藤紘一さん。

橋本 どういうぐあいに？

三浦 加藤紘一さんは、放火されて、お家が焼けちゃったことがあるじゃないですか。まあ、ひどいなと思ったんですけども、そうしたら、記者の方が、「いま、どんなお気持ちですか」と聞いたんですよ。そうしたら、「嫌な、大変嫌な気持ちがします」と答えていて、(笑) 笑い事じゃないんですけども、家が放火されて、いい気持ちがする人はいないじゃないですか。にもかかわらず、律儀に答えている彼が、何かちょっとキュンとなって……。あと、「いま、どんなお気持ちですか」と聞く記者もすごいなと思って。(笑)

幸いにして、人が死ぬとか、けが人とかがなかったからよかったものの。

「加藤の乱」も、意味がわからない点においては、戦後政治の最高潮にあったのではないか、意味のわからなさ度合いでは。

橋本 なるほどね。しかし、相当鋭い観察をなさっていますね。

三浦 いや、全然……。何か男泣きとかしていたじゃないですか。すごく楽しくて。

橋本 いろいろそういうものを集めたらまとまったものになりそうですね。

三浦 ならないと思いますけど。(笑) いまでも「加藤の乱」については、3 カ月に一遍ぐらい思い返しては、意味がわからなかったな、おもしろ一幕だったなと、一人でにやにやしているんです。男泣きを脳内で反芻して……。

橋本 へえ、そうなんだ。おもしろい性格ですよ、それは。

三浦 え、そうですか。

編集者の大切さ

橋本 最後なんですけれども、編集者との関係というのは、名伯楽というか、これもさっき話に出た吉村昭さんが、あるエッセーというか、インタビューというか、それで言っているんですよ。太宰治賞の選者だったんだけど、代表して自分がスピーチすることになったんだけど、そのときに、「この受賞者は俺に打たれたことが一度もない」、こう言ったというんですね。

つまり、その受賞作を読むと、その作家には編集者との出会いがないことがわかる。俺というのは、つまり、編集者なんだ。俺に打たれていない、つまり、いい編集者との出会いがなかったんですね。そういう的確なアドバイスを受けていれば、もっともつとよい作品になったはずだ、ということ吉村さんが書かれているんですよ。

これは、『しをんのしおり』の中でも、いろんな編集者との、私はあえて「確執」と言ったんだけど、確執ではなくて……。

三浦 攻防。

橋本 そうそう、同じことですけどもね。何かよきものに向かって、そこにある種の緊張関係が成り立っている。ここが非常に大切なところだという感じがするんですよね。

三浦 はい、そうですね。

橋本 そういう意味で、きつといい作品を残しておられる方は、いい編集者とめぐり会えたということ、あるいは編集者の言われることをやっばり十分自分の中でちゃんと消化しながらやっているんだなと思うんですけども、その辺りはいかがですか。

三浦 もちろん、そうですね。書くときは、もちろん、一人でですけども、それが出来上がって、商品として——商品という言い方もちょっとよくないかもしれませんが、でも、商品として出していただくからには、絶対独りよがりではだ

めなので。作品を的確に読んで、作品のための的確な指摘をしてくださる編集者の方にめぐり会えるかどうかというのは、本当に、本当に、これは運としか言いようがないですけども、とても大事だと思いますね。

その運も、やっぱり新人でデビューしたときには本当に運ですよ。だけど、その後は、自分が書いたものを読んで、この人の担当をしたいと、いい編集者、読みが的確な方に思っただけのような作品を書かないと、やっぱりだめなんだと思うんですよ。だから、すごい大事ですね、編集者の方は。

『あのとき、文学があった』（小山鉄郎著 論創社）というご本の中にも、さまざまな作家の方、編集者の方の姿が出てきますけれども、もちろん、文化部の記者の方の姿も、やっぱりすごく熱心で、小説について考えていらっしゃる方が大半ですよ。利潤追求だけを考えたら、とても出版とかというのは割に合わない仕事だと思うんですけども、そういうことではなくて、本当に小説が好きで、何とか書くときの支えになろうとか、手助けをしようとかというふうに思っただけの方の方がすごく多いなと思いますね。けんかもしすけれどもね。

橋本 むしろある程度しないとイケないんですよ。

三浦 そうですね。「絶対そこは直さん！」みたいなときだって、もちろん、ありますけれども、やっぱりそういうふうに話し合える人が編集者として担当についてくださると、非常にやりがいがありますね。

橋本 はい、時間になったようです。ありがとうございました。

三浦 いえ、何かすみません、こんな……。ありがとうございました。（拍手）

吉田 三浦しをんさん、ありがとうございました。それから、橋本五郎さん、どうもありがとうございました。

いつもと違うフォーマットでありましたけれども、三浦しをんさんの心の中とといいますか、感性の奥深さといいますか、そういうものがチラチラッと、三浦さんの心にすんでいる魔女まで見えてしまいまして、楽しい1時間を過ごしたかなと思います。本当にありがとうございました。

三浦 ありがとうございました。

吉田 三浦さんに、この講演の前にお言葉を書いていただきました。「言葉は心 三浦しをん」こういう揮毫をいただきました。ありがとうございました。

それで、感謝の意味を込めまして、万年筆をお贈りします。これでまた次のエッセー、小説を書いていただければと思います。きょうはありがとうございました。

三浦 どうもありがとうございます。

（文責・編集部）